

# 風のように

甘木教会

主任牧師：崔大凡

牧会委嘱牧師：竹田孝一



だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。

マタイ福音書10：31

津和野マリア聖堂

## 【説教要旨】

私は、どうしてかずっと津和野という街に魅かれています。新婚旅行も津和野でした。

ここは日本におけるキリスト教徒の弾圧の歴史の場所でもあります。私たちは日本の歴史であるということを心にいつも持っていることが大切だと思っています。

明治政府はキリシタン禁教を政策で引き継いでいました。そして、その弾圧、浦上（宗教改革500年でカトリック教会と共同で「平和の祈り」をささげた浦上天主堂のある街）4番崩れと弾圧がおきました。崩れとは弾圧という意味です。言われます。江戸時代から数えて4番目の弾圧であるということです。浦上4番崩れは、悲惨極まりない残酷な弾圧でした。信徒の中心人物114名を津和野、萩、福山へ移送することを決定し、以降、1870年（明治3年）まで続々と長崎の信徒たちは捕縛されて流罪に処されました。彼らは流刑先で数多くの拷問・私刑を加えられ続けたが、それは水責め、雪責め、氷責め、火責め、飢餓拷問、箱詰め、磔、親の前でその子供を拷問するなどその過酷さと陰惨さ・残虐さは旧幕時代以上であったのです。特に津和野藩は小藩で明治政府に睨まれ、藩が取り潰しになることを恐れ、その弾圧は激しいものでした。

津和野に乙女峠というところがあります。それは浦上のキリシタンが明治になって迫害された殉教の地です。水牢にさいなま

れるこどもにころべと役人はせまります。倒れ、苦しみに苛まれた兄弟の「雀の涙」という物語があります。

これをパンフレットにしたのが小城出身の国語学者・田坂誠喜先生で、私たち神学生は「古事記」を先生から学びました。

先生のパンフレットとは違いますが、「雀の涙」という裕次郎少年の物語を話します。

「兄さん、聞いてください。僕は、雀の親子にね、励ましてもらったよ。本当だよ。・・・僕の力じゃなくて、ほんとは、雀達に力をもらったんだ。」拷問8日目。全身は傷だらけ、血が滲み、膨れ上がっている。柱に縛り付けられた彼。縛り付けられてなければ、体はたちまち崩れ落ちる。朦朧とした意識の中、ふと思った。きっと、僕は、このまま、旅立ってしまうのだろう・・・。絶望の境地だった。「兄さん、僕はあの時ね・・・、聞こえたんだ。なんか、どこから聞こえてくるのか解らないけどね、なぜか声がしたんだ。もしや！て思って、目を開けたよ。だけど、声の方向見たら、屋根の軒下さ。マリア様のお声じゃなくてね、雀の子の声だったんだ。がっかりしてね、思わず、目を閉じそうになったよ。だけど、不思議なことにね、丁度、親雀が飛んできたよ。親雀はね、すぐに、餌をヒナの口に入れてやったよ。可愛かったよ。さっきまで泣いてた子雀がさ、母さん雀に、ご飯もらったよ。ちっちゃい雀。あんな雀。だけど、ちゃんと、愛されていたんだよ。・・・僕はね、それ、ずっと忘れてたから、苦しかったんだよ。ちゃんと愛されていたんだね。だから、僕は思ったよ。ああ、僕もきっと同じなんだ。だから、必ず救われる。僕はね、マリア様にごめんなさいを言いたくてね、お祈りしたいけど、手が縛られてて動けないよ。だけどね、心の中で、お祈りしたよ。だから、僕、きっと今日までは、どうにか頑張れたんだらうね。・・・だけど、兄さん、もう、さようなら。イエス様が救いに来てくださる時って、もう少しみただよ。さようなら。」

乙女峠の坂道「雀の涙」より

幼いながら裕次郎少年が語っているのは、神の愛への絶対なる信頼が、「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」というイエスの言葉に生きることを支えてくれたのです。「だから、必ず救われる。」という信仰こそが、苦しみ、死さえ越えていく力を与えられる証しをしています。

現代の時代において、私たちが信仰をもって生きるに際し、かつてのように迫害はありませんが、増々、私たちが、キリスト者として真実に生きることはいかに難しい時代でしょうか。私たちの語る神の愛は、現実の中で吹き飛ばされそうに、あるいは嘲笑の対象でしかありえないかもしれません。小さな力の前に何ができるかという空しさを覚えるかもしれません。ことができるかどうかは神のみ手にあります。未来において神の愛の支配があることを私たちは信じて疑ってはいけません。

確かに私の前に、中に自分を苦しめることがあるでしょう。浦上4番崩れの裕次郎少年が雀の親子の姿をみて、さっきまで泣いてた子雀がさ、母さん雀に、ご飯もらったよ。ちっちゃい雀。あんな雀。だけど、ちゃんと、愛されていたんだよ。・・僕はね、それ、ずっと忘れてたから、苦しかったんだよ。ちゃんと愛されていたんだね。だから、僕は思ったよ。ああ、僕もきっと同じなんだ。だから、必ず救われる。

という信仰において、明治のキリスト者が生かされてきたように今を生きる私たちも生かされています。

今においても、「だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」と語りかけて励ましの言葉をイエスさまからいただけます。小さな雀のように力なくても、私たちの今、未来は神の愛に支配されています。「だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」というお言葉が鳴り響いています。

宗教改革500年の記念礼拝の「平和への祈り」を浦上天主堂でいたしました。今日こそ、平和が脅かされている時代はありません。人の力に転ぶことなく、負けることなく平和への祈りをささげ続けましょう。

# 牧師室の小窓からのぞいてみると

AI（人工知能）

どんどんAIは、私たちの生活の中に入ってきている。園児をどう集めるか苦慮している。

そんなとき、「園児、募集、どうすればよいか 日善幼稚園」とAIに聞くとすぐに分析します。

園児が集まらない課題を解決するには、園独自の強みを明確にし、Web発信と地域連携を徹底することが最優先です。少子化や保育園志向が進む中、久留米市の日善幼稚園ようなルーテル教会附属の歴史あるキリスト教保育、少人数で行き届いた温かい教育環境の魅力を、現代の保護者のニーズに合わせてダイレクトに届ける必要があります。

これからは、AIをどう活用するかにあるが、逆に私たちがAIに振り回される、いや支配される世界がきている。



# 新米園長・瞑想？迷走記

一庭一

フレーベルは、「幼稚園（Kindergarten）」という言葉を作りました。Garten、「園」、あるいは「庭」です。園、庭は嬉しい憩いの場所だと私は思います。だから、幼稚園の庭は子どもたちが憩う、嬉しい場所でありたいといつも願っています。自然が一番、良いと思います。

季節の花が咲く庭にしています。ホームセンターで売られている季節の花の苗を買って植えます。しかし、これは人工的で、自然ではありません。どうも私的には満足がしていません。

じゃあ、どんな庭にしたいかということと子どものとき力いっぱい遊んだ野原です。野原です。そこに自然に育った草花がある。すすきのような自分より背丈の高い草があり、この中に入って遊ぶ。草をぼうぼうに生やしている野原に遊ぶ、楽しいでしょう。

いつか、草ぼうぼうの庭が誕生することを夢見つつ、今日もつい雑草を抜き、花を植えると矛盾だらけのことをしています。まさに瞑想、迷走しています。



## 日毎の糧



聖書： 17：恵みと慈しみの主よ、わたしに答えてください。 憐れみ深い主よ、御顔をわたしに向けてください。 18：あなたの僕に御顔を隠すことなく、苦しむわたしに急いで答えてください。 19：わたしの魂に近づき、贖い、敵から解放してください。 詩篇69： 17－19



### ルターの言葉から

それゆえに、あなたはキリストをあなたから引き離したり、彼がお与えになる慰めを逆にして自分を恐怖や絶望に追い込むような不敬なことをしないで、全信頼をもって彼のももとに走り寄りなさい。『慰めと励まし

しの言葉 マルティン・ルターによる一日一生』湯川郁子訳 徳善義和監修 教文館

### 主は、慈愛、真実、憐れみに富みたもう

69篇は危機による嘆きから救われることを願う典型的な嘆きの詩篇の形をもっている。危機に出合った詩人の嘆願を主としている。17節～19節は、詩人の危機に合ったときの救いの嘆願の祈りとなっている。この祈りは、出エジプトで経験した民族の歴史から生まれている。この詩は祈りを通して、この歴史を土台としつつ、自分たちの神は、どのような方であることを示している。『奴隷の家』エジプトから解放された民イスラエルは、幾度となく神に背いたが、神ヤハウエの慈愛と真実と憐れみを示されたのである。私たちが苦しむときも慈愛と真実と憐れみ富たもう神は必ず応えてくださる、これが私たちの神である。

主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。

出エジプト34：6－7

「『私』が救いの応答を求める拠り所として神ヤハウエの慈愛と真実と憐れみにすがっている祈り」①である。

今日も**慈愛、真実、憐れみに富みたもう主は**、ともに歩んでくださる。安心して出かけましょう。

①「詩編の思想と信仰Ⅲ」

月本照男 新教出版

祈り：主の恵みと慈しみの内を生かされていることを感謝して、強く、雄々しく一步を踏み出すことが出来ますように。アーメン。

## 甘木通信

4:9 ひとりよりもふたりが良い。共に労苦すれば、その報いは良い。4:10 倒れれば、ひとりがその友を助け起こす。倒れても起こしてくれる友のない人は不幸だ。4:11 更に、ふたりで寝れば暖かいが／ひとりでどうして暖まれようか。4:12 ひとりが攻められれば、ふたりでこれに対する。三つよりの糸は切れにくい。人間にとって最も幸福なのは、喜び楽しんで一生を送ることだ、と。  
コヘレト4：7～12



長く牧師をしている。一緒に歩んだ多くの先輩、同僚が天に帰って行く。ひとりよりもふたりが良いという共に歩んだ人がいなくなるとき、人間にとって最も幸福なのは、喜び楽しんで一生を送ることだという喜び楽しめることが少なくなりつつある。

牧師時代、倒れれば、ひとりがその友を助け起こす、ひとりが攻められれば、ふたりでこれに対する。三つよりの糸は切れにくいという実感できた幸福な日々であった。

ひとりよりもふたりが良いと、共に生きることができた幸福な時間だったと感じている。人間にとって最も幸福なのは、喜び楽しんで一生を送ることが出来て、今、いつ天に召されても良いという充実感がある。だからこそ、今を一生懸命に生きようと意欲が起きてくる。

私は決して孤独でなかった、共に生きていたという宝が私をささえていることを実感している。共に生きて下さった一人一人の牧師さんに感謝している。

(甘木日記)土) 日善幼稚園の運動会を子どもも保護者も一人ひとりが主役の運動会で、みんなで楽しく遊ぶ運動会に「ファミリー運動会」にした。日) 春の子ども祝福式、午後からチャーチオルガンによる昼のやすらぎの時を過ごす。月) 5:15分の空港バスで飛行場に。そして羽村幼稚園に。女性会が作った梅ジャムを職員へ渡す。夜、旧友と会う。火) 予定変更で羽村幼稚園。終わり羽田空港。日善幼稚園の職員のためにお菓子を購入。妻の為にサクランボウ。水) 早朝から幼稚園。職員会議。詩篇の注解木) 松崎保育園、甘木教会へ。いろいろとあって、20時越す電車。それから寝れずに気づくと3時。金) 雨、移植、挿し木したものは恵み。

## おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。 はぐちらない聖人（牧師）もいますが。

土）日善幼稚園の運動会。新しい試みで、見せる運動会から、子どもも保護者も一人ひとりが主役の運動会で、みんなで楽しく遊ぶ運動会に変えて「ファミリー運動会」にした。年少のkちゃんが年中の玉入れに飛び入り参加をしたり、ボールを揺らしたり、rちゃんは何回も走ったり、競技中にトイレに行く年長組だったり…ありのままの子どもたちを見ていただけました。どこまで、保護者にも、職員にも受け入れられたかは分かりませんが、職員の働きでここまで来られた。みんなに感謝。疲れた足を引きづって甘木教会へ。主日の礼拝準備。女性会が「梅ジャム」を作っていてくれていた。またゴーヤのテント作りの土台をHさんがしてくれていた。温かさに疲れが取れた。日）「春の子ども祝福礼拝」であった。信徒さんのお孫さん、聖和幼稚園の卒園生が親子で礼拝を守った。会堂に子どもの声があり、力づけられる。親しくしているオルガン奏楽者Nさんが東京からきてくださり、午後から「昼のやすらぎチャーチオルガンの響き」という小コンサートが出来た。未就園児のGくんはオルガンを聞きながら眠る。療養中のM牧師もご家族の助けで一緒に聞くことができた。聖和幼稚園の大きくなった卒園生も聞きにきてくださった。みんなが昼のやすらぎの時間を過ごせた。月）5:15の空港行のバスに飛び乗り、空港で待合時間があり、週報などを作成。ルーテル羽村幼稚園で管理者会議。火）予定変更し、急遽ルーテル羽村幼稚園へ行く。都心から2時間ぐらいかかるのが体にきつい。よく年寄りが動くと自分ながら驚いている。一つ一つの課題を乗り越えていくには時間を惜しまず、臨機応変にか。夜の飛行機で福岡空港、そこからバスで久留米。水）早朝、責任者が仕事、遅番で、園長が早く行かなければならない。通常保育が



松崎駅の花壇のアガパンサス

松崎駅の花壇のジギリタス 13時に終わる。その後、職員会議。少々、疲れが取れない。聖書の学びの準備。詩篇150篇中82篇を注解。後、68篇で完了。木）松崎保育園、甘木教会。松崎駅の花壇には夏の花が色々咲いているアガパンサスは東海教区の女性会のシンボルだったと思出す。ポチュラカを植える。大阪花博で日本でデビュー。初めて教会の車を運転する。運転感覚を取り戻して、安全運転を。羽村幼稚園のことが気になり翌朝の3時まで寝られず。金）ベコニア、インパチェンスの挿し木。付いて欲しい。雨、移植には良い。今年は挿し木で増やしていこう。

